

© The Tiffen Company, 2000

KODAK Gray Scale

C

Y

M

Kodak
LICENSED PRODUCT



ヤ 9
960

五十四号



門 70
號 960
卷



夜船閑話序

窮乏菴主饑凍選

窰曆丁丑の春長安の書肆松月堂何未と名
因一遠く草書公裁して吾が鶴林近侍の
左右小寄せそ云く伏して兼は老師乃古紙
堆中夜船閑話と名を云はは草稿あり書中
多く氣公録し種公表ひ人の營衛をして
充くしめをく長生久視の秘訣公取承む

夜船閑話序

謂ゆは神化鍊丹の至要ありと是故に在の
好交の君子是をかりて交荒旱の雲霞此
水一偶く雲水の徒侶竊かに傳写し來付
あるも秘重し秘藏して人おして見せぬは
天瓢むかしく櫃におさめて匿ししるが如し
預くは是は様は壽ぐふして以て之獨に恩
せん同く老師常小人を利するは以て老後
を樂しみる人と若ま人に利あはる師豈

に是を吞しみるんやと二虎會み來て師は室
を師微くとして笑ふ世小おいて緒子舊書櫃
は同く草稿蠹魚の腹中に蘇らる者中祭
小ごり緒子仰ら訂正傳写して既にも十來
紙は見付仰ら封養して以て京師より寄せん
と以て予が馬齒一日も忘る小長くはは以て予
端中は書せん交は責む予も亦辭せしめて
去は云く師鶴林に復する事大凡四十年鉢

囊公掛けしよりい來雲水參玄の布衲子纏
 う小門圃に跨ど師の毒涎と耳かひ痛棒公
 滋しと志て辞し去る度と忘る者或は十年或は
 二十年鶴林下の塵と水半も亦総に顧みざら
 底あると盡く是最林の頸角四方の精英あり
 各く西東又六里つらふ小分とく舊舎瘵完
 老院破廟借てびく菴居のまゝして清苦と
 朝艱著辛晝饑夜凍只小投とる者菜葉

麦敷耳に觸る者熱唱垢罵骨に徹とる
 者け咳拳痛棒見る者頼と攢め囚者肌
 汗と鬼神も海と涙と浮(は)るく瘵外も
 海と掌公合せ川べりて初め来る時宋玉
 河晏が義白のみそて肌膚光澤凝とる膏乃
 如くさる者も久しうて恰も杜甫賈嶋
 の形容枯朽顔色憔悴とるが如く或は居子に
 澤畔小逢ふ如く參玄軀命公顧とる底

の勇猛の上士にあつたりたる人び何の樂しき
 有てり斤時も湊泊とら復を得んや是故に
 付くに參窮度なること清苦節を失する族
 の肺金いそみかしく水分枯渴して痲痺塊
 痛難治の重症を發せんとは是れ憐み是
 を愁く師之縁の色あり者連日乍ち忍後
 不禁にして雲頭を按下しを婆の臭乳を
 絞つて是に授る小内觀の秘訣を以て乃ち

多く若是參禪辯道の工士心火逆上し身心勞
 疲し五内稠和せざる事ありんに鍼灸藥乃
 之はなめて是れ治せんと欲せし經ひ義陀扁
 余と云へとも輒く救ひ得る事能はざり亦よ
 他人還丹の秘訣あり休が軍ぐる絨小是れ
 修せよ奇功を見ら復雲霧を披ひて皎日
 見らぬ人若し此秘要を修せんと欲せば
 且しく工を抛下し結頭を拈放し先

須くく熟睡一覺を去りて未だ睡らずは
 うと眼と合せざる以前に向く長く支脚は
 展一強く縮むを後一身の元氣を以て脚
 輻氣海丹田腰脚足心のるふ充くしめ時
 に世親と云はるる一氣此の氣海丹田腰脚足
 心総に是れ氣が本来の面目と何の鼻乳あり
 氣此の氣海丹田総に是れ氣が自分の家郷
 くと何の消息あり氣が世の氣海丹田総に

是れ氣が唯心の深土と何の莊嚴あり氣が世の
 氣海丹田総に是れ氣が己身の弥陀と何の
 法から得くとお返へしと常に初くのみゆく
 妄想とて一妄想の因果つらば一身の元氣
 つらば腰脚足心のるふ充くし七隣下親
 然くする度いふこと藤おちせざる鞠の如きん
 恁歴に草くに妄想一おち去て入り七日乃至
 二七七日の経くしむに従ふのみ狭く聚る

老劣役劣の諸症底を拂て平癒せどんば
 老劣が顔と切らねば老劣に於て老劣を
 能礼して密々に精修を考く悉く老劣様
 の奇功と見ふ功の速速に進修し精廉に依倚
 とすども大坐皆全快に考く内親の奇功と
 續嘆志して休むに師の曰く休む輩を病全快
 とめて心く定むりこととる友かると轉治
 廿日轉く老劣の轉悟れば轉く進め老劣

初め参学の時難治の重病を發して老憂
 苦諸子小十倍せり進退難谷はるる考ふ小ひ
 そふ小思惟とくく生れて此憂愁に沈まん
 よりぬめくドココ死して世草囊を捨んは
 と何の幸ぞや此の内親の秘訣ははく
 全快を得る事今今の諸子乃如く至人の云く
 此は是神仏長生不死の神術なり中下は世
 事あり百歳ありあり一を餘は針と定むる

らび不則ち執喜不信一と精修意くする者
 大凡二十年心身次第に健康ふる氣力次第ふる勇
 壯なる度を覺る此に於て市を採てふも竊
 く不謂くらく繼ひ世を修ふ修ふ得て彭祖
 が八百の歳時分保ち得るも唯是一角福を
 乏智の守屍鬼あくるくの老狸の舊窠ふる
 睡るが如く終不壞滅に歸せん何故今既
 に獨りも葛洪張揚張義費張の輩らふ

見れば如く一に弘の大誓を憤起し菩薩の
 威儀を學びいふ大法施を行く虚空不先
 つて死せむば虚を後にして存する底の不
 退堅固の眞法身にお殺し金剛不壞乃
 大仙身を成就せんよと世に於てま正參
 玄の上士あまの軍分ゆく内親と參禪と共
 に合を並べ貯て且つ耕へ且つ戦ふと
 盡し茲に二十年年々一負を添へ二肩

と増し得く今既に二百衆に迫りし中
 方来の衲子芳居疲倦の族々或は心火逆
 上し正に發狂せんとする底を憐み安らに
 此内親の至要を傳授し之所に快癒せし
 め轉々悟はれ轉々進歩し馬年と案古稀
 に到りしと云ふも生後之病患をく齒
 牙全く揺落せし眼耳次第に分りしと
 初もそれハ變遷と忘る毎月あ彦乃法施

終に怠倦せし終に他方に應じて二百六百乃
 海象と衆會して或は又旬七旬と經不録に
 雲水の不望ふ終く胡說乱乃とるまふ大九
 六十會に及ぶと云ふも終に一日も罷編
 斎分損さば身心健康を力に次第ふ二三
 十歳の時より遙かに勝るとり是皆彼の内
 親の奇功に依るまふ貴人任菴の諸子各
 く悲泣化禱して云く吾が師大慈大悲願

くは内親の大畧を書きし書きてはぬめくは
 来禪病疲倦を軍のゆき者か救へ所并ら
 領と云ふに兼行なる神中何の鏡く云ふそ
 曰く大九生んん書ひ長素か保川の要形か
 練るに志るに形か練るの要神氣かしく
 丹田氣海のる小凝らしくし方にあり神凝る
 則か氣聚るしく則か昂ら真丹なる丹来る
 則か氣固く則か神全く神全く則か

素のくは是仙人九轉還丹の秘訣に契へし須
 らく知るる丹の果して外お小非ざる事
 と子萬唯心火か降下く一氣海丹田乃るよ
 充くしむる小背るしくのそ任菴の緒子此
 心要か勤めくしむげみ進んで意くごん禪
 病を治し勞疲を救ふのそにあはに禪門向
 上の度に到て年来疑團わむんくはちひ小
 めか拍して大笑とる底の大歡喜有るむ

何ぞ故そ月をうして味教盡く

惟時審曆丁丑孟正廿八賞

窮乏菴主飢凍炷香禱首題

Faint bleed-through text from the reverse side of the page.

夜船閑話

山珍初め冬學の日誓ひて勇極の信心を
 憤發し不退の道情を激起し精錬刻苦
 とす者既小波に波かち一夜忽然として
 落第と従前多女の疑惑根より氷
 融し曠劫生死の業根底小徹して區域と
 自々習く道ち人を去るを定に遠くは
 古人二三十年は何の程怪そと悦躡舞公

忘る者教月の向好日用を廻顧とるふ初練の
 二境全く調和せに去勢乃あ逸逸り脱洒
 あらに自ら謂らく極く精彩を有る重て
 一回捨命し去ん中然して牙冥を咬定し
 雙眼睛と瞳冥し寢食とも小瘳せんとも
 既にして未と期月小耳とさるふ心火逆上
 肺金焦枯して雙脚冰若の底小浸とらぬ
 くあ耳漢怒のるふ乃くがぬし肝膽若ふ

怯弱ふして舉措恐怖多く心神困倦し寐
 寤種々の境界を具はあ腋若ふ汗分生し
 支眼若に涙と常ふせふおいて遍く明解し
 授し廣く名醫を採ると云ふも百薬す
 功ふし或人曰く城の白河乃山裏に巖居
 する者あり在人は名を名あて白歯先生と
 之入靈壽に記甲子あ園と一人居に記里
 程を隔は人と見は度あ好はと乃く別は

み蒙茸を披け氷雪草鞋を咬と雲露衲
 衣を履と辛汗を滴一苦膏を流して漸く
 彼の苦老屋のまに到きは風致法施実にお
 後に丁こころのを噴入心魂震し忠と肌
 膚刺栗に且く巖根に倚て教息する
 者殺百少舌あひて夜を振ひ襟公正しく
 畏れく鞠躬して老子の中をわの朦朧
 として幽る目を収めて端中とらふる蒼髮

垂て膝に到り朱顔罷へて棗のぬし大布
 乃袍を掛け鞆草の席に坐せると窟中終るに
 方みよの笏ふして全く資を具を一机上
 只中庸と老子と金剛般若を置くと予
 則ち禮と盡して苦る病固を告げ且の救
 ひを請ふ少舌幽眼を穿いて熟く視て徠く
 として告げて曰く如く是の中生死の陳人
 檀栗を拾く食ひ糜麻に付はく睡はけ

亦更に何なるか人々月々愧に遠く上人の
 来りて其の言を聞きて予亦ち轉々啓叩く
 休すは時小遣悟れしとて予が心か扱くして猶
 しく五内を窺ひ九候を察と凡甲長こと平
 す惨平とて頼と攢めはあて云く已哉觀理
 彦小過と進修芥が失して終小世の重症公
 發と美に醫治し難た者い公の禪病あり
 若し鍼灸藥のこつ乃あは時んで而して後

に是を救ふんと欲せば扁倉力を注ぐ一華陀
 頼と攢むるも奇功を自ら成す能へど今既
 小親理のなる小破ら侍勤めて肉親の功を積ま
 どんば終に死は復能へど是故の起倒は必
 らば地に依るの謂なり予が曰く頼くは肉
 親の要秘を授く人學びて予も小足を修せん
 齒束く如くして容かあつては從容とて予
 告て曰く嗚呼この如きは同入るのを好む乃士

たり疾が昔一岡けるをを以て微しく公り
 告んる是養生の秘訣ふして人の知る事稀
 是より愈くごん必に奇功を具え視れ又
 期しはべし丈夫道分はくを儀あり陰陽
 交和して人物は於先天の元氣中間小黙運
 して五臟列の経脈行りる衛氣營血互に昇
 降循環する者晝夜に大凡九十度肺金に北
 流ふして膈上に浮び肝木に牡藏ふして膈

下に沈ぼむ心火の大陽ふして上部に位ひし
 腎水の大陰にして下部を占むし騰ふ七神あり
 脾胃各々二神を藏くと呼は心脈より出て
 吸は腎肝に入ると呼ふ脈のゆく度二寸一吸に
 脈乃行く度二寸晝夜に一萬二千八百の氣
 息あり脈一身を巡行するの五十次火の輕
 浮に志ては杯小騰昇を好む水は沈重ふして
 常ふ下流の務む若人察せし観照或は希

と失し志念或は度にふるは心火熾衝し
 て肺金焦薄と金母苦しむ則ち水子衰減
 と母子互に疲傷し七五位困倦し六属凌棄
 以四大増損して各々百一乃病が生じ百藥
 功を立とるを能はざと衆醫総に多からず
 て終小告るをよるに到る蓋し生かざるを
 困らざるが如し明君聖主は亦不化を下し
 小暗君庸主は亦不化を上し然に以上

恣小とる則ち九卿権に控し百僚窮を恃んて
 て民乃の窮困を顧るを交まらず小民
 困餓甚多し賢良瀆み竄じ民瞋り恨む
 諸侯離れ叛き衆夷競ひ起つて終小民度と
 塗炭に一國脈永く断絶とる小到は
 下に傳ふ小とる則ち九卿信を失し百僚初を
 勤めて亦小民乃の勞疲を忘るるを
 に餘満人の粟あり婦小餘満人の布有る群

賢^{けん}来^きり属^{ぞく}し諸^{しよ}侯^{こう}を服^{ふく}して民^{たみ}肥^こ一^{いつ}國^{こく}強^{つよ}く
 今^{いま}に遠^いとるの丞^{ちやう}民^{たみ}かゝく境^{さか}ひを侵^{せむ}とる敵^{てん}國^{こく}
 か一^{いち}國^{こく}才^{さい}斗^{とう}の智^ちをばくちまはさく民^{たみ}戈^か戰^{せん}乃^{なり}
 名^な分^{ぶん}知^ちるに人^{ひと}身^みも油^{あぶら}と移^{うつ}る至^{いた}人^{ひと}の常^{じょう}なり
 心^{こころ}氣^き分^{ぶん}して上^{うへ}に充^みつて心^{こころ}氣^き下^{した}に充^みつた
 則^{すなは}ち七^{しち}凶^{きやう}内^{ない}小^{せう}初^{しよ}く復^{たがひ}かゝく四^し邪^{じや}内^{ない}と外^{がい}より
 竊^{せう}入^にる能^{あた}へど營^{えい}衛^{ゑい}充^みち心^{こころ}神^{しん}健^{けん}なり口^{くち}
 終^{つひ}小^{せう}藥^{やく}餌^にの耳^{みみ}磁^ぢ分^{ぶん}知^ちるに身^み終^{つひ}に鍼^{しん}灸^{じゆ}の

痛^{いた}痒^{かゆ}と交^{まじ}りて庸^{よう}流^{りゅう}は必^{かならず}に心^{こころ}を奪^{さら}ひて上^{うへ}に
 恣^し小^{せう}と上^{うへ}小^{せう}恣^しにとる則^{すなは}ち方^{かた}すの火^ひ右^{みぎ}すの金^{かね}を
 射^やして五^ご官^{くわん}縮^{ちぢ}まり疲^{つか}れ六^{ろく}親^{しん}苦^くる一^{いち}み暇^{あそび}む
 是^{こゝ}故^{ゆゑ}に漆^{しつ}園^{えん}曰^いく真^{まこと}人^{ひと}の息^{いき}は是^{こゝ}を息^{いき}とるに
 雖^{なほ}といて一^{いち}衆^{しゆ}人^{ひと}の息^{いき}は是^{こゝ}を息^{いき}とる小^{せう}喉^{のど}を
 以^{もつ}て以^{もつ}て許^{もと}後^ごが云^いく蓋^{かき}一^{いち}条^{じょう}下^{した}焦^{あせ}に在^あり別^{わか}れ
 ず息^{いき}遠^{とほ}く氣^き上^{うへ}焦^{あせ}に在^あり別^{わか}れず息^{いき}促^{せま}けり
 上^{うへ}陽^{やう}子^しが曰^いく人^{ひと}に真^{まこと}一^{いち}の氣^き在^あり丹^に田^{でん}乃^{なり}中^{ちゆう}

に降下する則ち一陽は復と若人始陽初復
 の候は知くむと秋せば暖氣は心て是が信と
 とる一八九生は春の乃上部は常より
 清涼さるんを要し下部は小温暖か
 らんを要すよ支經脈の十二は支の十二に
 配し月の十二に應じ時の十二に合すと六爻爻
 化再周して一歳を全ふとるが如し五陰上
 小居し一陽下を占む是を地雷復と云ふ

冬至の候より真人の息は是は息とる小
 居して是の謂る一陽下に位し一陰上小居に
 是を地天泰と云ふ蓋正の候より萬物發生
 の氣は合んて百卉萌化の澤と云く至人元
 氣を占して下小充くむるの象人息を得は
 別は營衛充美し氣力勇壯なり五陰下よ
 居し一陽上に止はる是は地剝といふ九月
 の候より大是は得る則ち林苑を占く

奇荒落と足衆人の息と足と息とる小嘆と
 以てとるの象人足ん得る則に形容枯朽し
 齒牙揺う落に所以小延壽書に云く六陽
 共に盡く則是全陰の人死し易と一須らく
 知るべし元氣を以て常に下小充しむ是生
 命を以て樞要とるるを昔し吳契初石臺
 先け小見ゆ齋戒して鍊丹の術を習ふ先
 生の云く永小元玄真丹の神祕あり上この

器にあつるよりん得く得るを以て古く人
 黄朱子足ん以て黄帝に傳へ帝は七齋戒して
 足んを以て大道の外小去丹を以て去丹乃外
 小大道がし蓋し五無漏の法あり你らの六欲を
 去る五官各々其職を忘る則に混然とる本源
 の真氣彷彿として目前に充つ是彼乃大白
 道人の謂ゆ我が大を以て復た下の大小合
 する者なり孟軻氏の謂ゆ浩然の氣是を

ひそいて肺輪氣海丹田の回小藏りて歲月の
 市祿て是なるを守一少一去て是なるを去くを
 適ふ一去て一朝乍ら丹電を披露する則は
 内外伸る八紘四維總是一枚の大還丹は時ふ
 當く初て自己昂ち是天地に生つて生せに
 考るにほむく死せざる底の真箇長生久
 視の大神化なるものと覺得せん是を真正丹
 電功なる底の時節とて豈に凡小御一霞

小躑ぐると地を縮め水を縮む等の鎖束なる幻変
 心にて懐とよむ者さるんや大洋を攪ひく酥
 酪とて存土が変じて黄金とて赤賢白く丹
 は丹田あり液の肺液をり肺液を以て丹田より
 還へは是故に金液還丹といふ予り白く獲ん
 で余が同い法且く禪觀を抽下し努め力
 めて治るる心て期とせん若くはまの李士支が
 謂ゆる法降に偏する者にあつてはやんか一

交ふ割せは血或ひの滞碍ちやうがいとる交るるむの
 函微くわんびとて笑て云く然るは李氏りしのどや
 火の性しやうは炎上えんじやうとる宜よろしく是こゝにこゝむ
 なる水みづの性しやうは下くだとる小こ就しゆく宜よろしく是こゝにこゝ
 して上うへとるむべし水みづ上うへと火か下くだは是こゝにこゝ名なけて
 交まじとる交まじは則すなはち既すで済せとる交まじらざる則すなはち
 未い済せとる交まじは生なまの象しやう不な交まじは死しの象しやうあり
 李家りかが謂いゆる清降せいかうに偏へんありとる丹溪たんせきが

学まなぶ者ものの弊あやを救たすむんとする古人こじん云いく相火さうか上うへと
 易やすとる身み中の苦くはむべし多おほく補おぎなふ火かを割せ
 とるは心こゝろより血ち火かに君相くんさうの二義にぎあり君
 火かの上うへに居ゐりて静しずとる相火さうかは下くだとる
 して動うごははらざる君火くんかは是こゝに一心いしん乃すなはちまなり
 相火さうかは寧輔ねいほとる益えき相火さうかは支し股こあり謂い
 ゆは腎じんと肝かんとる肝かんは雷らいに比ひし腎じんは龍りゆうに
 比ひし是故ゆゑに云いふ龍りゆうとて海うみ底そこに居ゐせしめ

必と迅發の雷ふるん但一雷として澤中に
 藏と志め必に飛騰の龍ふるん海に澤り水よ
 わるべとまふ夏かき一足相火上り易とふ割
 するの終にあつばや又曰く心勞然とる則は
 虚して心熱に心虚とる則は是を補とふ小
 心下志て以て腎に交ゆ是を補とまふ既
 海の道あり公先ふ心火遂上して世重病公
 發に若し心公降下せとんへ緩ひ二界乃

秘密を行し盡しつり及起川米ゆじ且ツ又
 赤ら形く模道家者流に於とる公以て大いふ
 釋に吳さる者としてとる是禪か他日おをせ
 へ大いふ笑はるたの夏者くむ支觀の公觀公
 以て正觀とる多觀乃公公邪觀とる向とる
 公多觀を以て世重症公見ゆ今是を救ふに
 公觀を以ては向と可まるとる公若し心炎
 意火を収めて丹田及び心公のるふおは胸

瞞自然に清涼にして一^ん點の^け針^さ較^さと^し想^しあ^らく一
 滴の^し識^し浪^し清^し波^しか^らん^ん是^し真^し觀^し清^し涼^し觀^した^らん
 之^れ入^ら復^たか^らん^んと^し志^すん^んく^く禪^{ぜん}觀^{かん}を^た下^げせん^と
 佛の^い言^はく^んん^ん足^んふ^おさ^めて^然く^百一^乃
 病^の法^とと^阿含^に酥^を用^けの^法あり^んの
 勞^の疲^を救^へん^復た^妙なり^天台^の摩^訶止^觀
 に^病因^を編^むる^復甚^くと^盡す^り法^法を^説く
 復^も亦^甚く^精密^{あり}十二^種の^息あり^とよ^く

流^病の^法に^脐輪^を縁^{して}言^ふん^見る^乃法
 あり^んん^大定^を心^火を^降下^志て^丹田^及び^心足^んよ
 収^まん^んて^至要^とん^但病^の法^とる^のよ^くあ^ら
 ば^心に^禪觀^を助^とく^蓋一^繋縁^結其^の
 二^止あり^ん禪^美の^實相^の因^觀繋^縁は^心氣^を
 脐^輪を^法丹^田の^乃に^収め^守ん^んん^ん第一
 と^は仍^者是^を用^るん^ん心^利あり^古し^ん
 永^平の^開祖^師大^宋に^入て^必清^をと^天臺^{より}

おに師一日密室に入て益分移入後曰く元
 子坐禪の時さんか方の掌の上になくぬ一と
 是邪ら顛師の謂ゆは繫縁止の大畧あり
 顛師初め世の繫縁内親の秘訣を教へてそ
 家兄鎮懐が重病と萬死の中に助け救ひと
 師の復た精しくは小止觀の中に説けるまこと
 白雲和尚曰くおつねに心をて七腔子の中に
 充てしむ徒に区一衆分領一賓分接し

機に應じ乃び小参普祝七縦八横のりふおいく
 是分用ひて清くるまふ一老本殊に利益多き
 復た覺ふと定にせむ一足益一素回一
 みゆは恬澹虚無とまとい真氣足に志さぐり
 精神内に守し病何とより来しむとい入終
 に本つたぬ人者あしむら且つま内に守るの
 要元氣とて一身の中に充塞せし先二百
 六十の骨節八萬四千の毛竅一毫髪むらりも

欠^く缺^{けつ}のま^まか^かう^うく^くく^くめ^めん^んま^まん^ん要^{よう}に^にと^とれ^れけ^けん^ん
 養^{やう}ふ^ふ至^し要^{よう}う^うる^るる^るの^のん^ん知^ちる^る一^一彭^{やう}祖^そ白^{はく}く^く和^わ神^{しん}
 道^{どう}す^す氣^きの^の法^{ほふ}當^{たう}さ^さふ^ふ深^{ふか}く^く密^{みつ}室^{しつ}の^の鎖^さぎ^ぎ一^一牀^{じやう}の^の
 案^{あん}一^一席^{せき}の^の煖^{わん}め^め枕^{まくら}の^のさ^さら^らう^うこ^こ二^二寸^{すん}半^{はん}正^{せい}身^{しん}偃^{えん}卧^い
 一^一瞑^{めい}目^{もく}一^一て^て心^{しん}氣^きの^の胸^{きやう}膈^{かく}の^の中^{ちゆう}に^に閉^{へい}ぎ^ぎ一^一鴻^{かう}毛^{もう}の^の
 一^一て^て鼻^び上^{じやう}に^につ^つお^おく^く動^{どう}ら^らる^るる^るの^のこ^こ二^二百^{ひやく}息^{いき}の^の行^{かう}
 耳^{みみ}内^{ない}ま^まか^かく^く目^め見^みる^るま^まか^かく^く形^{かたち}の^のぬ^ぬく^くか^かは^は
 則^{すなは}ち^ち寒^{かん}暑^{しよ}も^も侵^{しん}ら^らと^とま^ま能^ねへ^へに^に蜂^{ちゆう}萬^{まん}も^も毒^{どく}す^する^る

年^{ねん}能^ねへ^へに^に壽^{じゆう}た^た二^二百^{ひやく}六^{ろく}十^{じゆう}歳^{さい}是^し真^ま人^{にん}に^にを^をう^うく^くと
 又^{また}積^{せき}内^{ない}筋^{しん}白^{はく}く^く已^{すで}に^に飢^うへ^へて^て方^{かた}に^に食^く一^一未^まど^ど飽^あに
 一^一て^て先^ま止^どむ^む散^{さん}步^ぽ逍^{せう}遥^{よう}一^一て^て務^{つと}め^めて^て腹^{はら}を^を一^一て^て空^{くう}
 か^かく^く一^一め^め腹^{はら}の^の空^{くう}る^る時^{とき}に^に當^あて^て仰^{おほ}ら^ら静^{じやう}室^{しつ}に^に入^い
 り^り端^{たん}坐^ざ然^{ぜん}然^{ぜん}一^一て^て出^し入^にの^の息^{いき}の^の數^{かず}一^一よ^よ一^一息^{いき}より^り
 か^かぞ^ぞ入^いて^て十^{じゆう}小^{せう}刻^{こく}一^一十^{じゆう}より^り數^{かず}一^一て^て百^{ひやく}に^に至^{いた}り^り百^{ひやく}か
 數^{かず}一^一ね^ねら^らま^まて^てふ^ふに^に至^{いた}り^りて^て世^よ身^み兀^{ぶつ}然^{ぜん}く^く一^一て^て
 世^よ心^{しん}寂^{じやく}然^{ぜん}く^くる^るま^ま虚^こ空^{くう}と^と号^いし^し形^{かたち}乃^{すなは}ち^ちこ^こや^やく^く

ありのくくくして一息おのけく止あり出でに
 入らざる時此息八萬四千の毛孔の中より雲
 蒸し霧起はらぬくを始知来れ諸病自ら
 除た諸障自然に除滅とらるるのて明悟せん
 譬へい盲人の忽然として眼を穿くが如きん
 世時人に存して路頭を指すとて安んずるに只
 おとらるるを後か省思して爾ら乃元氣を
 長きせん来ん是故にまゝ目力か養ふ者

は常に瞑し耳根か養ふ者かたに飽さるる
 か書く者か不黙とすと予が白く酥か用るの
 法は七つひひいべーや歯が白く行者定中四大
 調和せむ身心ともに労疲とらるを覺せむ
 心か起して應さふ世想か念ととべー譬へは
 色香清浄の麩糲鴨卵の丈ひさの如くある
 者頂上に頭をせんに其氣味微妙ふーく
 遍く頭顱のらるるを後くくくく潤

下し来くお肩及び雙臂を乳胸膈乃る
 肺肝腸胃脊梁腰骨次第に沾注し將ら
 去る此時に當て胸中の入積六象疝癖塊痛
 心小隨て降下とる水の下に注くぐりて
 歷くくく七聲あり遍身を周流し雙脚を
 温渥し足心に至く仰ち止む行者再び應
 さふ此親なる本とて一彼の後くくく一て咽下
 とる余の條流積りて滯て暖め蒸はれ来

信も在の良醫の種く妙香の菜物を集め是
 分羹湯して浴盤の中を盛りて浸して家々
 輪已下分漬け蒸はれぬ此親なる本とて
 唯心所現の故に鼻根下ら希有の香氣分
 びさ身根俄くふ妙好の鞭觸かふく身心調
 適さるる二三十歳の時其遙くに勝り此
 時小當り積聚を消融し腸胃を調和し覺
 一に肌膚光澤か生に若く勤めく怠くどん

べ何^{いづ}の病^{やま}り治^なせざ^らむ何^{いづ}の徳^{とく}りはぬ^らん
何^{いづ}の仏^{ぶつ}り成^なせざ^らば何^{いづ}の道^{みち}も本^{もと}せざ^らん
騎^{ぎん}の遅^ち速^{そく}の行人^{ぎんじん}の進^{しん}修^{しゆ}乃^{すなは}精^{せい}廉^{れん}に依^よけら^ん
の^と走^{そう}始^しめ^る廿^{じゅう}二^にの^の時^{とき}多^た病^{びやう}に^て七^{しち}の^の患^{うれ}ひに
十^{じゅう}倍^{ばい}の^の衆^{しゆ}醫^い皆^{みな}徳^{とく}に^て顧^{くわん}み^ざら^ば小^{せう}到^{たう}乃^{すなは}百^{ひやく}端^{たん}の
窮^{きゆう}じと^らし^ても^も救^{きう}入^にる^らぬ^らの^の術^{じゆつ}か^らし^て世^よに^おい^は
上^{じやう}下^げの^の神^{しん}祇^ぎに^おり^て天^{てん}仏^{ぶつ}の^の冥^{めい}幽^{ゆう}の^の語^ごひ^の預^よ入^に
何^{いづ}の^の喜^きひ^もそ^もわ^わ射^{しやう}し^ては^はも^も世^よの^の鞭^{べん}酥^そ乃^{すなは}妙^{めう}術^{じゆつ}の

傳^{でん}受^{じゆ}と^らる^る復^{ふく}の^の歡^{くわん}喜^きに^て依^よけ^らん^ん綿^{めん}と^らん^ん精^{せい}
修^{しゆ}と^らん^ん期^き月^{げつ}さ^らん^んに^て衆^{しゆ}病^{びやう}大^{だい}米^{まい}精^{せい}除^{じゆ}に^て
爾^{なん}来^{らい}身^{しん}心^{しん}輕^{けい}安^{あん}さ^らる^る復^{ふく}の^の覺^{かく}見^{けん}ゆ^らん^んの^の癡^ちと^らん^ん死^し
と^らん^んの^の大^{だい}小^{せう}の^の紀^き廿^{じゅう}二^にの^の年^{ねん}の^の因^{いん}縁^{えん}を^も知^しら^んに^て念^{ねん}
以^よ弟^{てい}に^て輕^{けい}微^ゐに^て七^{しち}人^{にん}秋^{しゅう}の^の膏^{こう}也^{なり}の^の一^{いつ}の^の志^しを^も
と^らん^んが^らぬ^ら馬^ば年^{ねん}今^{いま}歳^{さい}何^{いづ}十^{じゅう}二^にの^の年^{ねん}の^のも^もは^はと^と
知^しら^んに^て中^{ちゆう}の^の端^{たん}也^{なり}若^{じやく}州^{しゅう}の^の中^{ちゆう}に^て潛^{せん}通^{つう}と^らん^ん
何^{いづ}者^{しや}大^{だい}九^{きゅう}の^の十^{じゅう}二^にの^の歳^{さい}を^も人^{にん}都^とて^も知^しら^んま^まか^かし^て中^{ちゆう}

乃々顧るに怯も黄梁半熟の一夢れゆ今
 此山中吾人のまに何く此枯朽の一具骨を放
 て太布の單衣纏りに二三片を掛け嚴冬の寒
 威綿を折くの夜としくも枯腸を凍損とる
 につくづは山粒とを断て穀を私に受けど
 り半動もとどる数日に及ぶとしくも終り
 凍餓の覺へもあらず此親の力らあらずわ
 家今既に公小若るに一生利し盡さば底の

秘釈なめては此外更に何なりらんやとて自ら
 収めて我中に予も亦と流るる言んで禮辭に
 後々々々洞口から下りて木末纏りに残陽を
 掛く時小履を下の丁々々々てと谷小谷を歩
 わりし且つ驚き且つ怪んで畏れく回顧すも
 遙かに出が巖窟を離れく自り送り来る人
 見ると仰ら曰く人迹不到の山路西東分ち難
 一忍く帰客を悩せんを末末とくく飯程

公導ミチシルんと云て大駒オホウマ履ハキを着キて瘦鳩ウツクバ杖ツツをひこ
 嶮クサシ巖イハの躑ヒキと嶮クサシ岫ケの陟ノボるヲ才ヒサ飄ヒラ々ヒとして岫ケ遠トホ
 と行くが如く終マタ笑ウツクして先驅マタは山路ミチ遙トホるヲ
 里許ミヤウチが下シて彼溪水カノカミの不到トキて昂トキら白シく此の流水カノカミ
 に洩シひ下シれば必カナラに白川シラカハの邑ムラに到ツキらむと云て
 快然クワイゼンとして別わかれ且かつ々々柴チ支シして幽ユウる回クハ歩ハ
 と目送メクリするに才ヒサ老オシ歩ハの勇ユウ壯ソウなる才ヒサ飄ヒラ々ヒ
 としてを公ミヤウチ道ミチとくヒ化カして登ノボ化カと云人ヒト

の如く且かつ々々羨ウラヤムみ且かつ々々教ウチカは自恨ミヅカむを公ミヤウチ終マタるヲ
 此等コノトウの人ヒトに随ま逐ちするヲ才ヒサ結ムスばざる才ヒサ公ミヤウチ除ノゾクこと
 して帰かへるヲ才ヒサ未なて時トキ々に彼の内親カノウチノカタが瀆せん修しゆする
 に纒つ糸いと之ノ年としに才ヒサ公ミヤウチ従したがふヲ衆オホ病やま業わざ餌ゑ
 を用もちひに鍼はり灸しゆを公ミヤウチ假かくに任まか運はに疎しよ遠とほに特とくを
 病やまを治なするヲの才ヒサ公ミヤウチ従したがふヲ御ご公ミヤウチ校あむ
 才ヒサ公ミヤウチ齒は牙がが下したと才ヒサ公ミヤウチ底そこ乃すなはち難なん信しん
 難なん透とほ難なん解げ難なん入い底そこの一ひと着き子こ根ねに透とほるヲ底そこ

に徹して透りさして大歡喜かゆる者大凡
 六七回之餘の小船悦踊舞かたき者數か
 去るに妙喜の謂ゆる大悦十八度小悦數か
 知るに初て知る寔に亦か歡うさるるの古
 一二三緋の襪を着くといと足も常に
 氷雪の底に没に如くさける者今既にこ冬
 嚴寒の日と云へども襪せに燻せに馬齒既小
 古稀公越へるといととも拵にぬれたも點の小

病もゆさるた復に彼の神術の餘効あらん
 きふ復かるとも鵠林生死の殊喘多し少く無義
 荒唐の妄終を紀取していて佗の上流を詭惑
 とと足宿るとに靈骨有て一槌に既に成とる
 底の俊流のぬり小殺るにあはに癡純平ら
 ゆく骨病平に類いとする底看續して子細小
 親察せむ必に少く補ひさるらん只心別
 人の心拍して大笑せん未とゆる故を馬枯

其公咬人七年枕に嘔びよ

惟時

審曆 丁丑孟正二十九日

京都寺町通六角下町

小川源兵衛刊行

太上感應編 全一冊

太上帝コノ界ニ天降り葛仙公エ授玉ヲノ書ナリ此書ヲ行ナヒ感應ヲカウムリシコトヲ尾ニ附刻ス

善哉寶訓 全一冊

陰徳ヲ行ナヒ壽命長ク富貴ニシテ子孫ノ栄エシコトヲ悉ク述タル書ナリ

十善戒法論 全三冊

十善戒ノ功德并ニ因縁ヲアツテ諸人ヲ善ニス、マシムルノ書ナリ

般若心経鈔 全一冊

盤桂和尚ノ作ニテ愚俗ノ耳ニ通シヤスキヤウ一經意ヲ和解シタル書ナリ

梵網經迪蒙 全三冊

梵網經ノ十重四十八輕ノ戒相ヲ和解シ童蒙ノ心得ヤスキヤウニ述タル書ナリ

法華經和字解 全十冊

法花經ノ功德ヲ注釈シ愚昧ノ人ノ心得ヤスキヤウニ述タル書ナリ

佛說十王經 全二冊

十王ノ圖并ニ地獄ノ画圖ヲアラハシ諸人ヲサトシ教ニルノ書ナリ

禪宗無門闕鈔 全三冊

無門闕ヲ和解シ初心ノ人ニ自己本心ヲ明メシムル多ク心得ヤスキヤウニ述タル書ナリ

夜舩閑話 全一冊

白隠和尚ノ作心ヲ氣海丹田ニラサムルノ教ナリ心腑下ニシテハ自ツカラ無病長壽ナルコトヲシルヒシ

京都寺町通六角下町

松月堂

小川源兵衛啟行

